

2011年度 第17回  
外国語コンテスト（名古屋校舎）



であったと総括するのにふさわしいコンテストとなりました。

(石原 知英)

### 英語部門

2011年度外国語コンテスト英語部門は、12月1日（木）の午後に実施され、8名の参加者が自作の英語スピーチを発表しました。

審査委員には、ジョン・ハミルトン先生、デビッド・トゥイー先生、ニック・ブラッドリー先生の3名をお迎えし、スピーチの内容、表現の正確さ、発音の流暢さ、プレゼンテーションのスキルの観点から、評価して頂きました。

審査の結果、入選者は以下の通りとなりました。

- 1位 09J1244 原田知沙
- 2位 11C8064 岸里佳
- 3位 10M3050 木村貴仁

原田さんのスピーチは“Voter Turnout of Younger Generation”というタイトルで、若者の投票率の低さについて、その原因と解決策を提案するものでした。丁寧な論述と正確で効果的な表現で、ゼミで学んでいるテーマを分かりやすく伝えることができた点が評価されました。

岸さんのスピーチは“My British Friend”というタイトルで、ボーイスカウトの活動を通して知り合ったキャメロンくんとの交流を、多くの具体的なやり取りを通して描くものでした。明瞭で聞き取りやすい発音と、豊かなジェスチャーが評価されました。

木村くんのスピーチは“A Miracle”というタイトルで、叔母の身に起きた現実の出来事を、奇跡の出会いの物語としてまとめたものでした。ロマンチックで暖かい物語を、分かりやすく伝えた点が評価されました。

入賞者以外のスピーチも、それぞれに完成度が高く、また個性豊かなものでした。ブラッドリー先生が総評で述べられたように、全員が winners

### ドイツ語部門

2011年度の名古屋語学教育研究室主催第17回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2011年11月29日（火曜日）の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟3階にある第1研修室でおこなわれました。その結果を報告したいと思います。

今回の課題は、人気のあるグリムの童話から、“Hänsel und Gretel”（『ヘンゼルとグレーテル』）を選びました。内容は、皆さんご存知のことと思います。残念ながら時間の制約があり、その冒頭のほんの一部ということにはなりました。それでも学生の皆さんにとってはなかなか歯ごたえのある内容です。参加者は14名と、ドイツ語部門としてはかなりの人数が集まりました。

審査にあたったのは、ドイツ語の授業をお願いしている鶴田涼子先生と山尾涼先生、それから経営学部所属のドイツ語担当教員である私の3人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査をおこないました。

短いテキストではありますが、授業であつたことのないものであり、それなりの準備と練習が必要です。基本となる発音・アクセントの確かさはもちろんのこと、現代では使われない少し古い表現もあります。そうした困難にもかかわらず参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、その完成度を高いレベルで競う結果になりました。参加者いずれも優劣つけがたく頭を悩ませましたが、残念ながらわずかの差で順位を決めざるを得ませんでした。結果は、第一位（優勝）岩田寿紀（11M3292）、第二位森俊滋（11M3554）、第三位原田知沙さん（09J1244）となりました。

これが、みよし市にあるキャンパスでの最後のコンテストになります、今まで協力していただいた皆様、本当にありがとうございました。次回から新しいキャンパスでの開催になり、規模、内容ともより充実したものになりたいと願っています。  
(鳥田 了)

## フランス語部門

2011年度のフランス語部門のコンテストは11月28日(月曜日)に名古屋校舎の中央教室棟3階の第1研修室にて16時40分から実施された。みよし校舎で行われる最後のコンテストであるが、感傷に浸ることなく、例年通り、国際コミュニケーション学部のラッセン先生に審査委員長を務めていただき、厳正な審査のもと、コンテストが開始された。

みよし校舎最後のコンテストということでフランス語担当者も積極的に学生たちに参加を勧めたところ、21名の応募があった。2年生が4名、1年生が17名であったが、2年生の中には昨年の入賞者もいたので、1年生の苦戦が予想された。

今年も例年通り、予選と本選に分けて行い、課題の朗読を行ってもらった。今年は1年生と2年生以上で、課題を分けることにした。予選ではちょうどコンテストが行われている時期に授業で習っている箇所の朗読をしてもらった。

まずは予選において、6名の学生に絞られた。2年生2名、1年生4名でこの6名で決戦をすることになった。決戦用の課題はこのところやや難しすぎる傾向にあったので、今年は思い切って、できるだけ平易で基本的な単語の発音が正確にできるか、リエゾンなどは正確にできるかを判定できるような課題を選んだ。

21名の参加者から精選された6名の決戦進出者だけあって、甲乙つけがたい熱戦になったが、結果的には、1年生が1位から3位までを独占することとなった。

11J1266 高瀬 裕介  
11M3629 中村 優介  
11M3117 光岡 優輝

高瀬君は参加者の中でも群を抜いてすばらしい発音で、発音ミスがほとんどないばかりか、プロゾディ全体もとても1年生とは思えない安定した発表であった。2位の中村君も非常に優れた発音で、とりわけ落ち着いた発表の姿が評価された。3位の光岡君も上位二人と遜色のないほど優れた

発表であったが、いくつか発音のミスが見られたのが残念であった。それさえなければ順位は入れ替わっていたかもしれないほどである。

2012年度からは笹島の新キャンパスにて、国際コミュニケーション学部と経済学部の学生も交えてのコンテストとなる。いずれの学部のどの学年の学生も、お互いに切磋琢磨しあって、結果にこだわることなく、フランス語の勉強を楽しんでほしいと願っている。

(中尾 浩)

## 中国語部門 (法・経営学部)

第17回外国語コンテスト中国語 法学部・経営学部部門が、2011年11月28日(月)午後4時50分より、旧名古屋校舎中央教室棟3階第1研修室にて行われました。参加者は、3年生以上が8名、2年生が21名、1年生が4名の、計33名でした。

今回も課題文の朗読で、基礎部門(「入門・基礎」履修中の学生)と応用部門(「応用・発展・演習」履修中の学生)とに分けて行いました。基礎部門は「わたしは大学一年生です」という自己紹介文を、ピンイン(中国語発音記号)に従って朗読してもらいました。一方、応用部門は「旧正月前にぎやかな中国の雰囲気語る」という内容の文章を、こちらはピンインなしで朗読してもらいました。

両部門の評価基準は、いずれも第一に発音の正しさにあります。その他に、文章の区切り、強弱のつけ方や速度などが適切でスムーズであるかをみました。会場は熱気にあふれ、みな最後まで熱心に発表を聴いていました。

審査員は経営学部の矢田博士先生と法学部の鄭が担当しました。厳正な審査によって、下記の学生を入賞者として決定しました。

第1位 07M3217 小澤 寛記  
第2位 11M3154 渡邊 友梨  
第3位 10M3523 松本 迪子

第1位に入賞した小澤寛記さんは、きれいな発音と朗読のスムーズな流れという点が特に優れていて、課題文まで暗記してくれました。彼は上海復旦大学での一年間の留学生生活を終えたばかりで、みんなに留学から得た大きな成果を披露することができ、会場からもたくさんの称賛の声が送られました。

第2位の渡邊友梨さんは落ち着いた丁寧な朗読

と正確な発音が印象的でした。2011年度からのカリキュラム改革で、1年生の中国語の授業がこれまでの週1回から週2回に変更したこともあり、今年の1年生は、レベルがより高くなったように思います。実際に、今年はこのように1年生が2位に入賞しました。これは、コンテストを実施して以来、初めてのことです。

第3位の松本迪子さんは普段は照れ屋で、人前でしゃべることが必ずしも得意ではありませんが、いざとなると「やるしかない」という粘り強いところがあるように見受けられました。彼女のお友達の話によると、普段の会話ではよく中国語の単語を使って、周りを盛り上げるそうです。

入賞者のみなさん、参加者のみなさん、本当に有難うございました。

(鄭 高咏)

### 中国語部門 (現代中国学部)

第17回外国語コンテスト中国語部門(現中)は、2011年11月30日(水)16:40から、課題文暗唱部門12名、自由課題部門2名の合計14名が参加して行われました。審査は薛鳴先生、李志傑先生、安部の3名で行いましたが、今回は昨年と比べて参加者が少なく、特に自由部門は2名の参加ということで、次回に課題を残す結果となりました。今後は早めに動いて自由部門の参加者を増やしたいと思います。

課題文暗唱部門(1年生のみ)は例年同様の参加者があり、課題文をしっかりと暗唱しているばかりでなく、その表現方法にもそれぞれ工夫が見られ、1年生の中国語に対する熱い思いが伝わってきて、本当に感心させられました。2年生以上の学生の奮起に大いに期待したいと思います。

課題部門は、「愚公移山」という中国では大変有名な故事を暗誦してもらいました。内容は、中国に昔愚公という老人がいて、家の前にある山が邪魔なので、家族と相談の上これを他に移すことにしました。これを見た人が、「年寄りが山を移せるわけがない」とからかうと、愚公は「私が死んでも子や孫が後を継ぐだろう。強い信念があれば山でも移すことができる」といって山を掘り続けます。これを知った天の神が感動し、山を移してあげたというお話です。この話は、毛沢東が取り上げたことにより、中国では様々な状況でよく用いられたという経緯があるとても有名な話ですが、出場者はこの寓話の意味をしっかりと理解し、

単に暗唱するばかりでなく、愚公の固い決心を表情豊かに表現してくれました。

厳正な審査の結果、次の4名が入賞しました。

- 1位 11C8133 安部 百慧
- 2位 11C8015 白石 香織
- 3位 11C8003 持田 三琴
- 11C8091 箕浦 夕貴

次に自由部門ですが、今回は2名の参加でしたので、1位のみ之选出となりました。

- 1位 10C8130 加賀 悟

加賀君は、「我和劉老師(私と劉先生)」というテーマで、春学期に参加した中国現地プログラムで出会った中国人教員である劉先生との、日常の交流に加え、さらに中国語チャットQQを使って交流することにより、お互いに理解を深めることができ、また中国語や中国に対する興味がより強くなったという話をしてくれました。話としては少し長かったのですが、なかなか説得力のある語り口で良かったと思います。

(安部 悟)

### 韓国・朝鮮語の部

第17回外国語コンテストは名古屋校舎では最後のコンテストとなるという一種の感慨を含みながら、「韓国・朝鮮語」の部の本選は2011.11.28日(月)16時40分から実施された。参加学生は20名。今回も、全1年生よりは、やる気のある2年生以上の選択科目受講生(2年「発展」、3年以上「演習」)を中心に、準備および選抜をなした。そのため参加者学生は20名と少数ではあったも、いわば精鋭揃いであって、今回も審査員を悩ませた。かかる激しい競争のなかで、受賞者は以下の3名となった。

- 第1位 10C8045 本山 由奈
- 第2位 08M3523 加藤 美奈
- 第3位 09M3657 嶋崎 真悠

審査員は、多忙な非常勤講師の尹先生に無理にお願いし、常石と二人が担当した。特に記しておきたいのは、ほとんどの参加者が入賞者に負けない実力の持ち主であり、その力をいかんなく発揮してくれたという点である。

(常石 希望)

## 日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。毎年「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題です。

法・経・現中三学部の1年次の留学生は、毎年全員このスピーチに取り組んでいます。50名近くにもなりますから1年生だけの予選を行います。予選は16名ずつに分かれたクラスごとに行い、それぞれ3名の代表者が選ばれ、計9名が本選に進みました。2年次以上の留学生は、予選を経ず、直接本選に出場できますが、今回は残念ながら参加がありませんでした。次回の上級生諸君の参加を期待します。

2011年11月22日の本選では、日本語科目担当教員3名(架谷・鈴木・梅田)、学生審査員2名(留学生・日本人学生ともにスピーチ入賞経験者)、聴衆約50名によって審査が行われ、以下3名が入賞しました。

- 1位 法学部 11J1393 林 益「矛盾した国」
- 2位 経営学部 11M3661 張淼淼  
「いきいきしている桜」
- 3位 現代中国学部 11C8190 李 佳  
「日本のアニメ文化」(敬称略)

「留学生の見た日本」という単一のテーマですが、発表者はそれぞれ独自の着眼点から原稿を書き起こしました。トイレから見た日本の文化、迷惑をかけないことを重んじる日本人、様々な年代の人がそれぞれの理由で資格試験にチャレンジする姿…彼らが題材とする日本人は様々ですが、どれも現代日本社会の事実の一部を切り取ったものです。スピーチの内容が素晴らしかった分、技術面においては、若干の物足りなさが残りました。もっと練習すればもっと良くなるはずだと思われる発表もあり、その点はまだ満点とは言えません。さらなる高みを目指してほしいと思います。

ともあれ、日本語部門に参加できない数多くの日本語を母語とする学生には、ぜひ一人の聴衆として留学生の声を聞きに来ほしいと思います。きっと新しい発見があるはずです。

(梅田 康子)

## 外国語コンテスト 入賞作

### Voter turnout of younger generation 09J1244 Chisa Harada

Recently in Japan, a low voter turnout of younger generation is a serious problem. I belong to a seminar of political science. Our group studies theory of this problem and discusses what we should do to increase the voter turnout. Today, I explain the present situations of election, the reasons for not voting and how we should deal with the problem.

Present voter turnout is in a serious situation. Let me tell you about the result in Aichi prefectural governor election held on February 6 this year. In the election, the whole turnout was 53%. The highest was from late 60s to early 70s which accounted for 70%. On the contrary, the lowest was the younger generation of early 20s which accounted for only 34%. This low voter turnout of younger generation is not an exceptional case. Other local elections such as mayoral and municipal elections or national election result in just the same. The problem of voter turnout among younger generation happens in all the elections.

Why don't some young people go to vote? There are some reasons. First, some people don't go voting just because they don't feel like voting without reason, and they give their private business priority over election. That is, their sense of duty is faded. Second, they distrust politics. They think that whoever may be elected, the government won't change. Also they tend to think there are no suitable candidates and political parties. Young people who feel so are rather interested in politics, but they just don't go to vote. Third, some people tend to think that there is no need to use their vote. Most of the time, candidates and political parties that win the elections are decided by the organized votes, so they think their personal vote is unlikely to reflect the result of an election. In short, they have a feeling of alienation to politics. Finally, some people are not interested in politics. I think this is the most serious reason to explain why young people don't go to vote.